ひとをたのまず

小川未明

青空文庫

ある日、私は偶然、前を歩いていく三人の子供を、観察することができました。

甲は背が高く、乙は色が黒く、丙はやせていました。そして、バケツを下げるもの、ほうきを持つもの、そのようすはどこかへそうじをしに、いくように見えました。

その日、彼らは、学校で、成績表をもらったのであろうか、

「君は、成績が、よかった?」と、乙が、甲に向かって、ききました。

甲は、すました態度で、なかなか、それに答えようとしませんでした。乙が、まず自分から、

「ぼくは、優が一つで、あとみんな良だったよ。」と、教えました。はじめて、甲は、

「ぼくは、ちょうど、その反対だった。」と、いいました。

「じゃあ、良一つしかなく、あとみんな優なのね。」と、乙は、その成績の、あまりいいのに、おどろいたようでした。

甲は、だまって、うなずきました。

「君は?」と、こんどは、乙が、丙に向かって、ききました。いままで、二人の話をききながら、歩いていた丙は、下を向いて、なんといわれても、だまっていました。

「いいだろう、教えても。」

そう、乙が、いったけれど、丙は、やはり下を向いていました。

＊　＊　＊　＊　＊

三人は、神社の前へくると、境内へはいりました。あたりを見ると、そこの鳥居にも、かきねにも、こないだの、選挙のビラが、はりつけられてあり、また、方々にらくがきがしてありました。だから、それを、きれいにするためだと、すぐわかりました。

彼らは、石段のところで、ひとまず、手に持ったものをおいて、休みました。

「これを、みんなきれいにするのかなあ。」と、乙は、境内を見まわしました。

「なに、わけはないさ。」と、甲が、ほほえみました。こんなときでも丙は、だまっていました。

私は、とりすました甲にも、また、陰気に見える丙にも、どこか不自然なところがあるのを感じました。ひとり、色の黒い乙だけは正直で、明朗な気がしました。

とつぜん、丙が、石段を下りて、鳥居の外へ出ていきました。

「にげるんでない、ずるいや。」と、甲がおこりました。

「すぐ、帰ってくるのだろう。」と、乙がいいました。

「ぼく、よんでくるよ。」と、甲が立ちかけました。

「ほっておきよ。」と、乙はとめたけれど、甲は、境内からかけ出しました。

私は、用たしをするためここをはなれなければなりませんでした。そして、一時間ばかりの後、ふたたび、ここを通りかけました。

「あの子供らは、どうしたろう。」

三人とも、はたらいているだろうか。それとも、もうおわって、帰ったであろうか。こんなことを考えながら、神社の境内へきてみると、ただひとり乙だけが、まだはたらいていました。

あとの二人は、どうしたろうか。あれから、こなかったのだろうか。私は、なんとなくたまりかねて、

「君、ひとりでやっているの、てつだってあげようか。」と、乙に声をかけました。

この元気な少年は、ふいによびかけられて、びっくりしたように、こちらをふり向いたが、「だいじょうぶです。もう、あとすこしばかりですから。」と、いって、にっこり笑いました。

私は、ひとの力をたのもうとせず、ひとりでやりとおす少年を、けなげに思いながら、しばらく、高い木立の間から、青い秋空の見える、すがすがしい境内を、散歩したのでした。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集　14」講談社
　1977（昭和52）年12月10日第1刷発行
　1983（昭和58）年1月19日第5刷発行
底本の親本：「みどり色の時計」新子供社
　1950（昭和25）年4月
初出：「少年少女ペン」
　1949（昭和24）年1月
入力：特定非営利活動法人はるかぜ
校正：酒井裕二
2020年2月21日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（https://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

ひとをたのまず

小川未明

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/